

# ペンテコステ事件の

## 歴史的背景について

田 中 左 右 吉

本 文 (私 訳)

(使徒行伝第二章 一一—一三節)

(1) そしてペンテコステの日のたけなわに近く、みんなの者が一緒に集っていると、突然、(2) 天から恰度激しく吹きつける風がもたらしたような響きが起って、彼らが座っていた家全体にあまねく拡った。(3) そして恰も炎のように分れた舌が彼らに配たれるのを見、また彼らの一人びとりの上にとどまるのが見られた。(4) するとみんなの者は聖霊にみたまされ、(5) みたまが彼らに語らさせるままに、「(いつもと異なる) ほかの言葉で話しはじめた。

(6) さてエルサレムには居住しているユダヤ人たちがおった。天下のあらゆる諸国民の中からの信心深い男たちが「来ていた」。(7) そこで、その話を聞きつけた群衆は集って来て驚かされた、なぜかなれば、自分の国訛で彼らが互に語りあっているのを聞いたからである。(8) 彼らは全く驚き怪んでいった、「御覧なさい！これらの話している人々はみんなガリラヤ人たちではありませんか？(9) それなのに、何うしたことでしょう、わたしたちの生れ故郷におけるその国訛で、わたしたちがお互に聞こうとは？(10) わたしたちはパルテヤ人たちとメジャヤ人たち、それからエラム人たち、そしてメソポタミヤ地方、ユダヤ〔異説「ガラテヤ」〕並にカパドキヤ、ポントとアジャヤ地方、フルギヤ並にパンフリ

ヤ、エジプト及びクレネ地方に近いリビヤ地方の部分に居住している人々、それから駐留しているローマ人たち、ユダヤ教徒並に改宗者たち、クレネ人たちとアラビヤ人たちであります。わたしたちの言葉で神の大御業をあの人々が語るのを、わたしたちは聞くのであります。」本<sup>(11)</sup>当に、みんなの者は驚き惑うて、お互にいいあった、「これは何うしたことなのでしょう」と。<sup>(12)</sup>しかし、<sup>(13)</sup>はたの者たちは嘲って「彼らは甘い新酒をたらふくやっているのだよ」といった。

【註】 〇内の数字は節

この訳文はヴァチカン写本を原文とした。

(1) 「ペンテコステの日」の「日」(単数で定冠詞付)はユダヤ的の表現法でないが、著者ルカには他にも例がある、ルカ22の7「除酵祭の日」参照。

(3) 「炎」と「舌」とは、ユダヤ人の間では形の上から関係づけて考えられていた。エノク14の9 10 15参照。

(4) 「言葉」は原語では(3)の「舌」と同一語である。

〔 〕内のことは原文にはないが、前後関係を明かにするため挿入した。

(5) 「ユダヤ人たち」は、シナイ写本に除かれていて無く、エフレーム写本では「信心深い」と「男たち」の間に入っている。

「居住している」と「ユダヤ人たち」とは14節のペテロの説教の冒頭「ユダヤの人たち、ならびにエルサレムに住むすべてのかたがた」と合わせるために後から挿入されたのであらうとの見方もなされている。 Foakes Jackson & Kirsopp Lake: The

Beginnings of Christianity, part I, vol. V, p. 113. (此の項はキルソップ・レークの執筆)

(9) 「異説「ガラテヤ」」としてののは、これはティムリウス Martin Dibelius の説で、彼によれば原文は *Tavariar* あるが同じ意味の *Tavakian* が *Tavakian* の代りに使われていたのを誤記したのであらう。 Studies in the Acts of the Apostles, p. 91.

「地方」をつけたのは原文で定冠詞がつけられている地名である。

「並に」を用いたのは *τὴν κατ'* が使われている処である。

⑤ 「ローマ人たち」はハルナック Adolf Harnack に従えばローマの市民権をもっている人々である。The Acts of Apostles, p. 66

「ユダヤ教徒並に改宗者たち」は文字通りに訳せば、ユダヤ人たち……であるが、改宗者と対照的におかれているから、ユダヤ教徒と訳して見た。ハルナック等はこのユダヤ人たちというのはディアスポラ *Diapora* (パレスチナ外移民のユダヤ人) と考えている。前掲書 p. 70 参照。

## 上

ペンテコステ事件といえはイエスの弟子たちが約束の聖霊(ルカ24の49・使徒1の4)を「炎のように分れた舌」として与えられたことである。主の逮捕・十字架で一旦は失望離散に瀕した弟子たちも、キリスト復活の信仰に生氣を取り戻し、エルサレムに留って聖霊の降臨を期待し、或いは宮において、或いは「屋上の間」(使徒1の13)において、祈禱三昧の生活を送っていたのであった。そしてイエスの逮捕から七週間後のイスラエル民族が彼らの生活綱領あるいは民族憲法ともいべき十戒をシナイの山でモーゼが神から受けたという記念の大祝祭日ペンテコステを迎えたのである。その日、世界各国に移民しているユダヤ人たちも、祭を期してエルサレムめざして帰省していた。中には移民団を代表して来ている者もあった。いづれにせよ、祭は高調に達し、エルサレム全域の雰囲気は祭気分で湧きかえっていた時である。イエスの弟子たちの祈禱会も靈的な雰囲気に包まれ、靈氣満ちあふれた、その時である。突如として其処に大靈動は勃発したのである。それについて、使徒行伝の記者は「突然、天から恰度激しく吹きつける風が齎したような響きが起って、彼らが座っていた家全体にあまねく揺った」と記し、その結果として「恰も炎のように分れた舌が配たれ」「いつもと異なるほかの言葉で話しはじめた」と伝えている。

ヘブル語では、神のみたまも風も同じ *רוּחַ* (*ruach*) である。従って本文第二節の表現は神のみたまの著るしう

御活動があったことを伝えるものであり、その結果弟子たちがいい慣れた語でなく、ほかの言葉で話し出すようになったのである。

諸ここに用いられている「舌」あるいは「言葉」の *ῥῆματα* は複数である。そこで、「ほかの言葉で話し出す」ようになったとは二種類以上の外国語を話すことができるように弟子たちが恵まれたという奇績が起ったのであると一般には考えられている。しかし、弟子たち一人について外国語が話せるようになったのであると解する者もある。例えばハルナック Adolf Harnack の如きは、この奇績は十二使徒ただけに起ったことで、彼らが一人ひとり別々な十二カ国語を話すようになったのであるとの見解から、ルカが九節のバルテヤ人以下十二の人種名を挙げているのであるとしている。The Acts of the Apostles, p. 67

この場合ハルナックは11節の「クレテ人たちとアラビヤ人たち」は10節の「改宗者」にだけかかるものと解している。

然し、ここで注意したいのは「ほかの言葉」に用いられている「ほかの」についてである。ギリシャ語には「ほかの」に *ἑτερος* と *ἄλλος* との二語がある。後者は単純に「もう一つ」(one besides) といったように只だ数的に區別しての「ほかの」である。前者についても同種同質のものとの別のものという場合に使わなくてもないが、それは第二義的な用い方であって、本来的には本質的に異なるものを區別しての「ほかの」のである。(one of two)。即ち性質・形態・等級・種類などを異する全然別な「ほかの」ものを指すのである。そして、ここに用いられているのは *ἑτερος* なのである。(特にバートン Ernest De Witt Burton のガラテヤ書註解 ICC の Appendix V. *ἑτερος* and *ἄλλος*, pp. 420—422 参照)

13節の「はたの者たちは嘲って」の「はたの者たち」も、この *ἑτερος* が用いられ、門外漢的な者たちを指しているのである。故に、この場合は「ほかの者たち」とせずに「はたの者たち」と訳して見た。蓋し、その方が原意に近いと思う。

そこで「ほかの言葉」であるが、一般には *ἐρεπος γλώσσας* は自国語以外の言葉として外国語という風に考えられ、そのように翻譯されているが、「ほかの」から深く突っ込んで考究するならば、それは人間の言葉とは本質的に異った言葉であり、「みたまが彼らに語らさせるままに」が冠せられている所以も肯かれるのである。

尤も *ἐρεπος γλώσσας* を外国語と訳すのに当然とすべき理由もある。というのは *γλώσσα* 丈でも外国語の意味で用いられる場合がある。Moulton and Milligan の辞書 *The Vocabulary of the Greek Testament* では方言の意から転じて外国語となったとあり、Liddel and Scott の辞書 *The Greek-English Lexicon* では、説明を要する外国語とされている。

然らば「みたまが彼らに語らさせるままに」語る言葉とは如何なる言葉であろうか。著者ルカ自らが、続くペテロの説教のうちで、それを説明している、即ち予言者ヨエルの予言を引いて、神の霊を注がれた者は予言する者——神のみ意を伝える者——とされるのであると説明している（使徒2の17-18）。人間が彼の意のままに語る言葉でなく、それとは全く異質的な神のみ意のままに語る言葉を宣べる者にされたのである。そして、この場合、神のみこころのままに語るとは約束の聖霊を授けられ、みたまが語らさせるままに、地のはてまで、イエスの証人として（使徒1の8）、「彼の名によって罪のゆるしを得させる悔い改め」を、もろもろの国民に宣べ伝えることである。（ルカ24の47）。

旧約聖書においては「聖霊」なる文字は僅かに詩篇51の11とイザヤ書63の10-11の二カ所にあるだけであるが、いずれも予言を語らしむるものとして現わされている。ラビの文学においても屢々予言者をして予言せしむるものは聖霊であるとされている。

(Foakes Jackson and Kirsopp Lake: *The Beginning of the Christianity*, vol. IV, p.3 参照)

ルカ福音書＝使徒行伝の語彙についての権威であるカッドベリ (Henry J. Cadbury) もっている様に、両書の著者は用語については何時もセンシティブであって忽せにしていなう (Foakes Jackson & Kirsopp Lake: *The Beginning of the Christianity*, vol. V, p. 61 「ギリシヤ語を使うユダヤ人」(使徒6の1参照) についてカッドベ

リ執筆、参照)。「炎のように分れた舌が彼らに配たれ」その結果「ほかの言葉で話しはじめた」というのも、ただ文章の々あ、々々々、れ々から選択措辞しての *ḥayyān* 使用だとはいえない。また単に彼の師である使徒パウロの用法を念頭において「異言」(コリント第一 12 章参照)として *ḥayyān* で話すというのだとも断ぜられない。彼には深い考えがあり、彼の信仰と知識に基づく見識から此の語を用いていると見ねばならない。

次にヘブル語では、舌 *לשון* (*lashōn*) というものは神を讃美する時の主導的肉体機関であるとせられている。(サムエル記下 23 の 12 参照)。

なお詩篇 35 の 28・66 の 17・71 の 24・26 の 2 を見よ。若しグロースをハッキリさせるためにギリシャ語本を読まれる時には、LXX では 9-10 篇が一篇に編まれて 9 篇になっているから 35 篇は 34 篇をというように繰り上げて見られたい。マカビー第四書は原文はギリシャ語ではあるが 10 の 21 に「神に讃美の歌をうたった舌」の句がある。

ルカには、その心得があつて、その伝統的用法がしていたことは、次ぎの個所によって明かに知ることができる。

「すると、立ちどころにザカリヤの口が開けて舌がゆるみ、語り出して神をほめたたえた。」(ルカによる福音書 1 の 64)

「わたしの舌はよろこび歌った」(使徒行伝 2 の 26 b)

この使徒行伝の句は詩篇 16 の 9b の引用であるが、ヘブル語聖書からの引用句でなく、之はギリシャ語訳本からのもので、その 15 の 9b である。邦訳現行聖書でも明かなようにヘブル原本では「わたしの魂は喜ぶ」である。しかし LXX では「わたしの舌はほめたたえた」である。(*hōi ḥayyānato ū ḥayyānato*)

使徒行伝 10 の 46 では「彼らが異言を語って神をさんびしている」と訳されているが、「彼らが舌で語って神をさんびしている」と訳さるべきである。又同 19 の 6 「聖霊が彼らにくんだり、それから、彼らは異言を語ったり、予言をし

たりし出した」となっているが、「聖霊が彼らにくだって、彼らは舌を以て語り、そうして予言した」となるべきである。

このように吟味して来ると「みんなの者は聖霊にみたされ、みたまが彼らに語らさせるままに、いつもと異なるほかの言葉で話しはじめた」ということは、彼らが今までの人間的意志欲求による自己中心の言動生活を断ち切って、只だひたすら神のみこころのままに、(一)地のはてまで主イエスの証人として、彼の名によって罪のゆるしを得させる悔い改めを促す宣教をすると共に、(二)この神の人類救済の大御業を讃美し、栄光を父なる神及び御子キリストに帰し奉ることを始めるようになったことを、表明しているのである。

之を要するに、ペンテコステの日にイエスの弟子たちが聖霊を受けて、みたまが語らせるままに話しはじめたということは、彼らが宣教に必要な *παρρησία* を以て話ができるようにされたことである。*παρρησία* とは自由に腹藏なく話すこと、又は自由にして大胆な確信ということである (Thayer's Greek-English Lexicon of New Testament による)。使徒行伝が弟子たちのその後の宣教ぶりについて誌している次ぎの個所を参照するならば、そのことは明確に理解することができるであろう。

2 の 29・4 の 13 29 31・9 の 27・13 の 46・18 の 26・19 の 8・28 の 31

最後の 28 章では「はばかりず」となっているが、その他では全部「大胆に」話す、語る、論ずる、あるいは、宣べ伝えた、と誌され、4 の 29 31 の場合には其処に居合せた全クリスチャンが語ったとあるが、その他では、ペテロ、ヨハネ、バルナバ、パウロ、アポロが、そうした宣教をしたことが伝えられている。

## 下

使徒行伝第二章九節の「ユダヤ」について「ガラテヤ」説のあることは先きに紹介したところであるが、ブルース

F.F. Bruce は、これは多分広い意味の「ユダヤ人の地」即ちエジプトの境界線からユーフラテス流域に至る範囲であつて、この地名リストの中からシリヤが省かれているのを説明することにもなろうといふ（The Acts of the Apostles, the Greek Text with Introduction and Commentary, p. 84 参照）。ヨハネス F. Josephus によれば、アケラオ Archelaus 王（マタイ 23 の 23）が王位を剝奪された時、キレニアス Cyrenius, Roman Senator によつてユダヤはシリヤ州に属せしめられたと伝えられている（ユダヤ人祖先史 18 卷 1 の 1）。ユダヤ人の学者ラーディン Max Radin のいうところに従えば、紀元前五世紀頃からシリヤと称せられた範囲は、東はメソポタミヤを含め、西は小アジアのタウラス山脈からエジプトに至る線内で、このうちタウラス山脈以南からシナイ山に至る間、ペリシテ人 (Philistine) の町々のあつた地方を、その住民名から採つてシリヤ・パレスチナとギリシヤ人は呼んでゐたといふことである。（The Jews among the Greeks and Romans, p. 76）

ヘロドータス Herodotus (BC 四八四—四二五年) の言葉に「パレスチナのシリヤ人たち」というのがあるが、彼らの割礼について論ぜられているから、このシリヤ人はユダヤ人のことであらうともラーディンは説いている（前掲書 80 頁）

ヨエル書 3 の 6 に「またユダの人々とエルサレムの人々とをギリシヤ人に売つて、その本国から遠く離れさせた」の句があるが、同じくラーディンによると、紀元前五世紀頃からパレスチナ地方から送られる奴隷はシラス Syrus「シリヤ人の意」という名を以て呼ばれるのがギリシヤ人の常であつたという。（前掲書 78 頁）

これらを照合考察するならば、かなり古い時代から「ユダヤ」は「シリヤ」と同意義に用いられていたことが肯かれるのである。

緒、九節から十一節にわたる地名リストの中に当然加えられるべきであると気づくものに、シリヤのほかに、バルカンのマケドニヤやアカヤがある。そうして、この除かれている地方は、いずれもギリシヤ人のランドであることに気が付くのである。これについてハルナツクは「著者は純然たるギリシヤ人地域を彼のリストの中に含めていない



といわれている。なぜかならば、国際語を使うギリシヤ人にとってはペンテコステの奇績はちつとも奇績とならないからである。——少くとも彼らはそんな奇績を必要としなかった」(The Acts of Apostles, p. 68<sup>※</sup>)と論じている。当時の世界において国際語 (the Universally-spoken language) とつて Greek Koinē (κοινή) が流通していたことは疑う余地なき事実であつた。例えば、ヨハネによる福音書第十九章二十節には、イエスが十字架につけられた時の罪状書が「ヘブル、ローマ、ギリシヤの国語で書いてあつた」と報ぜられているのも、ギリシヤ語が当時の国際語としての性格を証明する一記録である。ここにヘブルの国語というのはアラム語であつて其の頃のユダヤ人の国語である。ローマの国語というのはラテン語であつて、ローマ政府支配下にあつて、その派遣総督ピラトによつて処刑されたのであるから、その公文書としてその国語で記されたというのは当然のことである。然るに、それらに加えて、ギリシヤの国語の罪状書があつたということは即ちギリシヤ語コイネが当時の国際語として広く流通し一般人口に膾炙され親しまれた言葉であつたことを裏書きする有力な証拠である。

※しかしハルナックは「この説明は巧妙であるが、正しいものとはし難い」と否定的である。

翻つて、弟子たちがイエスに召され、彼に師事して親しく教導を受け、その宣教の事業にも参加した、活動の舞台であつたガラヤは、イザヤの昔から「異邦人のガラヤ」(9の1。マタイ4の15参照)と称されて来た地方である。これを地図について見れば、北西から西を回つて南西に至るところは、ツロ、シドンを中心としたフェニキヤに境している。南はサマリヤであるが、スクトポリス (Scythopolis、ヘブル名ベス・シャン Beth-shan がギリシヤ人によつて改名された町) を経て東へヨルダン河畔に至り、東は河岸に沿うて北折しガラヤ湖の東岸に達する線を境にして、ギリシヤ人の植民地であるデカポリス地方に接している。フェニキヤの各都市はツロ、シドンをはじめ強力なギリシヤ人移民によつて紀元前四世紀初頭から建設され、フェニキヤ全域にわたるギリシヤ化はアレキサンダー大王の遠征軍が南下に当り此の地方を通過(紀元前三三二年)以後、急速に浸透してゐた処である (The Cambridge

Ancient History, VII, p.191, 及び Radin: The Jews among the Greeks and Romans, p. 79 参照。) こうしたガリラヤ四囲の情勢を考察すると、イザヤ時代(紀元前八世紀後半)から「異邦人のガリラヤ」といい古るされた内容は変わったであろうが、イエスの時代・使徒たちの時代を通じて、ガリラヤは依然「異邦人のガリラヤ」であって、<sup>※</sup>ヘレニズムの感化を多分に受け、ヘレナイズされた処であったことを肯定することができるのである。

※アレキサンダー以後のギリシャ文化一般を Hellenism という。

イエスの弟子たちにもアンデレとピリポというギリシヤ名前の者がおり、また、イエスがシモンにペテロの名を与えたという事実は何を語るのでしょうか。パウロはシモンのことをケバといつてアラム語によつての呼び方をしているのに、福音書ではいずれもペテロというギリシヤ語による名を使っている。ヨハネによる福音書によれば、ピリポはエルサレムにおいて数名のギリシヤ人と応待してイエスに彼らを紹介する手筈をアンデレと相談している(12の20—22)。

このピリポに紹介を頼んだギリシヤ人たちとイエスが面談されたか何うかは福音書記録に明かでない。しかしイエスが嘗て弟子たちを伴れて、ツロの地方を旅行され、それからシドンに下り、地中海沿岸から東に転じヨルダンを渡って、デカポリスの地方を通じて何時ものガリラヤ湖畔に帰還の旅程を辿つた時のことである(マルコ7の24—31)。イエスは一人のスロ・フェニキヤ生れの婦人に迫られて、その娘を病魔から救われたが、このフェニキヤ婦人とイエスとの問答において彼は譚話をさえ交えて皮肉にたっぷりな受け答えしておられるが、イエスは直接に彼女に語りかけ、通訳を要した跡は見えないのである(同上25—30)。

ギリシヤ勃興の歴史を顧るならば、ペルシヤの軍をマラトンに破つて(紀元前四九〇年)から漸次その勢力を増大し、遂に超人的アレキサンダーの出現するに及び、ギリシヤ人の感化影響は甚大な圧力となってイスラエル民族の上にも加わつて来たのである。

有名なマカビー一族の勇敢な反ギリシヤ運動は、勝利を納めたかに見える(ヨセフスのユダヤ人祖先史Ⅻ6—11、マカビー第一書1—3章参照)。しかも、この運動の総指揮官格であったユダス・マカバアス Judas Maccabeus ですから、マカビー第一書4

の59によれば、戦勝祝にギリシヤ風の祭典を行い、これを以後「国の祭」に加えることを命じている。そののみか、同書12の21を見れば、スバルタの祭司を迎えて、ユダヤ人とスバルタ人とは共にアブラハムの子孫であつて兄弟民族であることを宣言する儀式さえ行なわれたことが伝えられている。

斯うして打ち寄せるヘレナイズ勢の澎湃たる風潮には、イスラエルの伝統保守の保障となるべきモーセの「律法」すら、之を喰ひ止め打ち返さず皆とはなり得なかつたことをマカビー第二書第六章は明かにしているのである。

これらの記録が示すような、情勢は結局、外部から加わる勢力の強力さを肯かさせるのである。この点は「異邦人のガリラヤ」で触れたところと同じ轍である。即ち北辺の事情はガリラヤについて述べた通りであり、東辺は「ヨルダンの彼方」Transjordanであり、デカポリスに接し、南方はアレキサンドリヤ中心のギリシヤ文化華やかな地域に堺している。こうした四囲の状況下に、全パレスチナがヘレナイズしなかつたとしたら、その方が寧ろ不思議とされるべきであろう。

更にパレスチナ全般のギリシヤ化氣運を助長したものにディアスポラ *διασπορά* のあつたことを看過することはできない。即ち国外移住のユダヤ人、所謂「離散している者」(ヤコブ1の1。ペテロ第一1の1参照)或いは「イスラエルの追ひやられた者」(詩147の2。申28の25、同30の4参照)たちといわれている人々である。彼らは、南はアフリカの奥深くエレファンタインや地中海沿岸のクレネやアレキサンドリヤから、北は旧セリュウカス王家のシリヤ地域から、いづれもヘレナイズされて流れ込んで来た。旧シリヤ地域のメソポタミヤ方面からのそうした帰還者の中にはバビロン俘囚者の子孫もあつたといわれている。

当時のディアスポラについて、ハルナックは四百万乃至四百五十万といひ、ジャスター J. Juster は六、七百万と数えているといふことである (Foakes Jackson and Kirsopp Lake: The Beginnings of Christianity, vol. V. p. 287 参照)

エレファンタイン Elephantine のディアスポラについては同所から発見された多くのパピリがそれを証している。因みにバビ

ロン俘囚の時パレスチナに残されたユダヤ人の大部隊が此処に逃れて彼らのコロニーを作って之れに居住するようになったのだといわれている。

アレキサンドリヤについては、その都市開設に當って特にユダヤ人のための居留地区が設けられたこと、旧約聖書ギリシャ語訳が同所でなされたことなど、幾多の事績が伝えられている。

クレネについては、マカビー第二書の著者ヤソンが其処の住人であつたこと、イエスの十字架を背負されたシモンがクレネ人であつたこと（マルコ15の21）などでも解るであらう。

ローマにも多くのディアスポラがおつて、屢々ローマ市民を困らしたことがあつた。その一例は使徒行伝18の2にも記録されている。

斯くの如く、内外からのギリシヤ化勢力の渦巻く裡にあつたユダヤ人たちであつたから、彼らの大半は日常の用語としてギリシヤ語コイネを語り、それを以て読み書きをしていたのである。イエスの弟子たちについても、そうして、エルサレムに誕生した最初のクリスチャンの群れについても、同じことがいえるのである。それが聽て使徒行伝第六章の「ギリシヤ語を使うユダヤ人たち」と「ヘブル語を使うユダヤ人たち」との紛糾、後者間のペテロ、ヨハネ以下の十二使徒に対比するステパノ、ピリポ以下の七人が挙げられ、基督教運動最初のエポックを劃する發展を見るに至るのである。

## Historical Approach to the Miracle Story On the Day of Pentecost

### Résumé

The miracle on the day of Pentecost is a miracle 'to speak with other tongues.' There are two words concerning to "other" or "another" in Greek, i.e. ἄλλος and ἕτερος; the former generally denotes simply distinction of individuals, but the latter implies difference of kinds. In this case Luke uses ἕτερος not ἄλλος. Therefore the phrase, 'speaking with other tongues,' expresses that the disciples 'spoke with' entirely different kind of human language. "They were filled with the Holy Spirit and began to talk in other tongues as the Spirit caused them to make utterance": i.e. they began to proclaim the Christian message, just as given by the Spirit to them, as a prophet prophesies God's message directly given to him.

After their master was crucified, most of the disciples of Jesus were disappointed, and some of them went away home. The faith of the resurrection of the Lord, however, called them to come together at the Upper Room prayer meeting, and day by day the number of them increased. On the Day of Pentecost, when they were assembled, suddenly the Spirit descended upon them and began to preach boldly and openly the Christian κήρυγμα (message).

'Speaking with other tongues' does not mean speaking in foreign languages, nor speaking of *glossolalia* as Paul wrote in 1Cor. 14th chapter. It just indicates that they received Christian faith and spiritual power to proclaim the message freely and boldly.

When we read the list of the nations that gathered, hearing the echo of the descending Spirit on the disciples, and their conversation, we find that there are omitted such ones as those in the Greek-speaking area, Syria and Balkan (cf. Acts 2:9-11). Now

the Greek-koinè was universally spoken language in those days. Some scholars explain that if the miracle on the day of Pentecost is the miracle to speak in foreign languages, it is not a miracle at all to them. Anyway Greek was a universally spoken language, even in Palestine, under the Roman government, so that most people commonly spoke Greek, besides Aramaic (cf. Jn. 19:20). The title on the cross of Jesus was written in their national language Hebrew, i.e., Aramaic, while their official language was Latin, and Greek their generally speaking language. In the 8th century B.C., Isaia said "Galilee of the Gentiles" (9:1). The meaning of "the Gentiles" may have been changed in the Greco-Roman period from that of the Pre-Exilic period. But in the days of Jesus and his disciples Galilee was still a Gentile land. The influence of the Greeks had been much upon the Galileans, for Galilee was surrounded by Greek colonies; Decapolis, Phoenicia and Syria. We can see why there were already two groups, Hebrews and Hellenists, as soon as the Christian Church started (cf. Acts 6:1).